

古事類苑

器用部四

飲食具四

甕

〔新撰字鏡〕瓦甕馳偽反、小口罌、彌加、甕鳥共反、去、罌加、甕鳥江反、三加、甕美加

〔倭名類聚抄十六〕瓦器甕本朝式云、甕美加、今案音長、辨色立成云、大甕和名同上

〔箋注倭名類聚抄四〕瓦器那波本甕作甕、廣韻甕瓶也、那波氏蓋依之校改、按注引唐韻、則校改似是、然

延喜式皆作甕、則改作甕、終非是、蓋源君引式、舉甕字、唐韻無甕、有甕、謂甕甕同字、故以唐韻甕字音

音式甕字也、然式甕字似皇國所制字、恐非、即唐韻甕字、類聚名義抄作甕、亦蓋依他書改者、其誤與

那波氏同

〔東雅十一器用〕甕ミカ甕サラケ倭名鈔に本朝式を引て、甕はミカ、甕はサラケ、○中ミカとはミは

深也、深山讀てミヤマ古語にカと云ひしは、ヤクといふ語を合呼びし也、ヤクは燒也、即今俗に瓷

器を呼びて燒物といふが如く、瓦器にして深きをいふ也、

〔倭訓前編三十美〕みか日本紀に甕をよみ、新撰字鏡に甕をも甕をもよめり、みは大の義、かはか

めの略成べし、釋にも上古物の大なるをみかといふ、甕星甕粟など是也、と見えたり、一説に甕星

も甕粟も嚴星嚴粟の義にして、みかいか相通ふともいへり、延喜式に甕字をよめり、甕の誤字な

るべし、倭名抄に見えたり、甕也、みかのはらた、へなどいへるは、甕をはらともよめる故也、みか

のべも甕をべともいふをもて也、されど祝詞式に、甕上高知甕腹滿並と書せるぞ本義なりけん、